

## ニコラ・ロランの祈禱者像

— 《ポーヌの祭壇画》と祈禱者像の「モデル」をめぐって —

今井澄子

はじめに

— ニコラ・ロランと初期フランドル絵画の祈禱者像 —

ニコラ・ロラン (Nicolas Rolin, 一三七六頃～一四六二年) は三代目ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボン (善良公、在位一四一九～一四六七年) に仕えた政治家である。ロランは政治家として多くの功績を残しただけでなく、さまざまな美術作品の注文主でもあった。そのなかでも、画家ヤン・ファン・エイク (一三九五頃～一四四一年) に一四三〇年代なかばに制作させた《ロランの聖母子》(図5) は、初期フランドル絵画史上において重要な作例である<sup>①</sup>。それは、本作品において祈禱者として描かれるニコラ・ロランが、祈禱対象である聖母子と同じ空間・ほぼ同じ高さで向かいあい、仲介聖人もなく画面を二分している点が大胆かつ革新的なためである。

聖なる空間に参入する祈禱者の姿は《ロランの聖母子》以降の初期フランドル絵画の祈禱者像に多く描かれるようになった。一四四〇年代中頃～一四五〇年代中頃にロヒール・ファン・デル・ウエイデン (一三九九～一四〇〇～一四六四年) が制作した《ブラーデリンの祭壇画》もその一例で

ある(図6)<sup>②</sup>。だが、ロヒールが同時期に描いた《ポーヌの祭壇画》(図1、図2) に表わされた祈禱者ロランは、聖なる人物とは別のパネルであったり、隅の方で祈るなど、一見伝統的な表現にとどまっているように思われる。

《ポーヌの祭壇画》については、祭壇画の表側に表わされた「最後の審判」図像を中心に多くの分析がなされてきた<sup>③</sup>。祈禱者の表現については、グリザイユで表わされた聖人に跪拝する構図との類似から、ファン・エイク兄弟による《ヘントの祭壇画》(図26) を先例と位置づける論考が多く<sup>④</sup>、祭壇画表側に描かれる祈禱者ロランの姿があわせて考察されることは少ない。しかし、初期フランドル絵画の祈禱者表現の展開を正確に把握するためには、同時期の祈禱者像はもちろんのこと、ニコラ・ロランが制作させた祈禱者像を比較・分析する視点も必要であるように思われる。

そこで本稿では、《ポーヌの祭壇画》の祈禱者の表現を中心に、ロランの祈禱者像を比較・検討する。その際には、ロランのブルゴーニュ公国における政治的立場をふまえるとともに、フランドル地域の文化を先導し「モデル(模範)」となった者としてブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンに注目する。それにより、《ロランの聖母子》から《ポーヌの祭壇画》へ

といたる祈祷者像の表現の変化の背景を明らかにしたい。

## 一、ブルゴーニュ公国の「第一人者」ニコラ・ロラン

### (一) 政治家ロランの生涯

まずは、ニコラ・ロランの生涯を、その政治的立場から確認したい。

ニコラ・ロランは、一三七六年にブルゴーニュ公領のオートタンに生まれた<sup>⑤</sup>。ロラン本人は貴族の出であることを主張したが、オートタン市民であった<sup>⑥</sup>。ロランの祖先をたどってもその証拠は見られず、公国の貴族を成員とする金羊毛騎士団（一四三〇年に結成）にも加わっていない。

ロランは、はじめは弁護士として身を立て、一四〇一年までにはパリの最高法院で働いていた。そこで、二代目ブルゴーニュ公ジャン・サン・ブルー（無畏公、在位一四〇四〜一四一九年）から能力を認められ、一四〇八年にはジャンの弁護士となった。ジャンは一四一九年に暗殺されてしまうが、ロランは刺客者を送ったフランス皇太子を非難する演説を行い、ジャンの後継者フィリップ・ル・ボンから寵を得る。そして、一四二二年には、騎士の位と、ブルゴーニュ公国で最高の職であるシャンスリエ（chancelier）の地位を獲得する<sup>⑦</sup>。シャンスリエという職は、そもそもは勅許状を作成し確認する書記役であったが、しだいに書記局の長として、書記たちが作成した文書を公証・管理する役割を担うようになった。そして、フィリップ・ル・ボンの治世下において権限を拡大し、シャンスリエ本来の務めと関連する国璽尚書と宰相（首相）、すなわち司法と行政のトップを兼ねる公国最高の役職となる<sup>⑧</sup>。

このシャンスリエ職のものと、ロランの政治家としての力量が発揮され

たのは、百年戦争中の一四三五年にフランスとイギリスとの間で締結されたアラス条約である<sup>⑨</sup>。ロランは準備のために膨大な文書を作成した。また、条約の締結に至るには彼の抜かりない手腕が不可欠であった<sup>⑩</sup>。またロランは、一四五五年のフィリップ不在の際には、公の代理を務めた<sup>⑪</sup>。さらに、最初の嫡出子ジャン・ロラン（一四〇八〜一四八三年）には聖職者の道を歩ませ、宗教上の立場も固めようとした。ジャンは、オートタンの司教代理やシャロン司教などをつとめ、一四五〇年には五一歳で枢機卿になるまでに出世している<sup>⑫</sup>。

このように、ロランは長いあいだ圧倒的な権力を握っていたが、しかしその身が常に安全であったわけではない。一四三二年から一四三三年にかけては、未遂に終わったもののロランを誘拐する計画が進行していた。公国内でも、追いはぎが流行したり、一四三七〜一四三八年にはベストが猛威をふるったりするなど、必ずしも平和な状況ではなかった。そして、しだいにフィリップ・ル・ボンとその息子シャルル（一四三三〜一四七七年）との対立が顕在化してきた一四五七年頃のこと、ロランは、勢力を伸ばしてきたド・クロワ家に失脚させられてしまう。ロランは、シャンスリエの地位は失わないものの、実質的に故郷に引退させられてしまった。そして、そのまま実権を取り戻すことなく一四六二年にオートタンで亡くなり、同市のノートル・ダム聖堂に葬られた。ロランの最晩年は華やかなものではなかったが、彼はじつに四〇年近くも公国の政治の中心にいたのである。

政治家としてのニコラ・ロランの姿は、フィリップ・ル・ボンへの献呈場面を表わした写本挿絵に見いだすことができる。『エノー年代記』（図7）においては、フィリップが中央に堂々と立ち、年代記の献呈を受けている<sup>⑬</sup>。右側にはフィリップの息子シャルルをはじめ、金羊毛の首飾りをつ

けた騎士団員が並ぶ。そしてロランは、フィリップの左後方に、青い服をまとい、書類を手にする姿で表わされる。この献呈場面の表現はひとつの型となり、構図や登場人物をほぼ同一にするコピーが複数制作された(『アレクサンダー大王の物語』パリ、国立図書館、Ms. fr. 9342.f.5 / 『ジラルール・ド・ルシヨンの物語』一四四八年、ウィーン、国立図書館、Cod. 2549, fol. 6r. など)<sup>(13)</sup>。フィリップの背後に描かれる従者の数は挿絵ごとに異なるが、ロランはつねにフィリップのすぐ左後ろに控えており、ロランとフィリップとの関係の近さがうかがえる。

## (二) ロランに対する同時代人の評価

ニコラ・ロランに対する政治上の評価は、公国の年代記者ジョルジュ・シャトランの言葉に示されるように、きわめて高いものであった。

このシャンスリエは：戦争であろうと、和平の問題であろうと、財政であろうと、ありとあらゆることを一人で管理し、自分の手で動かし、引き受けた。公はあらゆる点で彼を頼りにし、第一人者として全面的に信頼していた。そして、いかなる官職も収益も、また国中のどの都市も、どここの田舎でも、いかなる寄贈でも、いかなる借財でも彼の手を通らないものはなく、終始直接に監督した者よりも彼の意見が左右した…<sup>(14)</sup>

同様に、年代記作者のジャック・デュ・クレルクは、ロランが死去した際に、つぎのように評している。

最近、ブルゴーニュ公国のオートタンで、公国のシャンスリエにして騎士であるニコラ・ロランが、八六歳くらいで亡くなった。彼の息子はオートタンの司教であり、教皇の枢機卿であった。前述のニコラは、低い家柄の出であったが、高等裁判所では常に第一の弁護士であった。続いてシャンスリエになり、この職務を見事に操ったため、四万フロリン以上の年金を得るほどであった。そして彼の息子たちは皆大領主になり、娘たちは、とても高貴な人と結婚した。ロランはまた、公が彼の治世に強固に支配したように、実際に公をも支配した。大諸公でも彼を恐れない者はいなかった…<sup>(15)</sup>

このように、年代記作者たちは、ニコラ・ロランがブルゴーニュ公国の「第一人者」であり「公をも支配」する力を持っていたことを認めていた。ただし、「第一人者」ロランの力は、和議や会議のための書類準備などの事務作業上の側面に発揮されていたようである。たとえば、バーゼル公会議(一四三一〜一四四五年)において神学者や使節がロランではなくフィリップあてに発言したことからもうかがえるように、公国の代表者としての立場は言うまでもなく、最終的な判断や決定権もまたフィリップ・ル・ボンにあったと捉えるべきだろう<sup>(16)</sup>。

ともあれ、実力者ロランに対するフィリップ・ル・ボンの信頼はあつかった。それは、ロランが没した時に、周囲の者がフィリップに伝えるのをためらったこと、そして真実が明らかになると、フィリップがショックのあまり重い病気にかかってしまったと報告されることにもうかがえる<sup>(17)</sup>。

他方で、年代記作者たちはロランの批判もしている。以下は、前出のシャトランの言葉である。

…この人は、世俗に関することについてはとても賢明だったが、彼の歩んだ道は人生の二つの知恵を把握していなかったようだ。というのは、彼は移ろいやすいもの、誤ったものにあまりに身を捧げすぎたため、より確かなものや、より記憶に留めるべきものから遠ざかってしまったように思われる。彼は、地上が永遠のものであるかのように、地上でさまざまなものを獲得した。そのため彼は、分別を失ってしまっただけだ。<sup>18)</sup>

ジャック・デュ・クレルクも、つぎのように評している。

…このシャンスリエは、世俗的には、王国の賢者の一人と評されていた。というのも、霊的な点に関しては、沈黙するしかないからである。<sup>19)</sup>

ニコラ・ロランへの批判は、世俗世界のいわば対極としての精神性や信仰心の問題に集中している。だが、ロランの信仰心については、年代記作者たちのことばを額面どおりに受け取ることは適切でないように思われる。そこには、ときに権力を利用して強引な手段を用いることもあったロランへの反発が込められていた可能性も高いからである。<sup>20)</sup> たとえば、法律家でもあったロランは公国に司法機構を設け、貴族の私有財産の没収を進め、彼らから接収した土地や敵から押収した土地を自らのものにした。敵から得た土地は、本来は元の所有者に返されるものだったが、ロランは例外的に返却を免れるようにした。<sup>21)</sup> 人々は法律家ロランに容易に反論できなかつ

たからこそ、いつそう恨みをつのらせたのではないだろうか。

また、ロランに対する反感は、シャトランがロランの信仰心を批判する一方で、フィリップ・ル・ボンの信心深さを高く評価していたことにもあらわれている。<sup>22)</sup> たしかにフィリップは日々ミサに熱心に出席し、戦場まで時祷書を持参したと伝えられるが、他方では、贅沢な祝宴を好み多くの庶子をもうけるなど、世俗の人生も謳歌していた。フィリップは、歴史家ホイジンガによって「敬虔な俗物 (den devoten werelding)」の典型人物に挙げられたように<sup>23)</sup>、熱心な信仰と冒瀆的・世俗的な言動を共存させる当時のブルゴーニュ公国の人々の心性を体現する人物である。そしてこの観点からは、ロランもまた「敬虔な俗物」と位置づけられるため、ロランとフィリップに根本的な差異はないように思われる。<sup>24)</sup>

このような同時代人のロランに対する根強い批判には、彼が貴族出身ではなく、一市民からの成り上がりの政治家であったことも大きく影響しているのではないだろうか。実際に、この貴族でないという出自はロラン自身も意識せざるを得ず、公国の貴族に匹敵する存在となるよう駆り立てたようである。それは、以下に検討するように、領主権や美術作品などの財産の獲得や、宗教上の寄進などの行為にもあらわれていく。

## 二、「地上の財産」の獲得と「モデル」としてのブルゴーニュ公

ニコラ・ロランは、生涯を通じて精力的に財産を増やしていった。ロランは、前述したように法律家としての知識を駆使してブルゴーニュ各地の領主権を獲得し、ボーリュー、エムリー、ボーシャン、フォンテーヌ・ル・ディジョン、サランなどの領主となる。<sup>25)</sup> さらに毎年のように領地を獲得



していった結果、当時まれに見る土地所有者となり、領地内に多くの城や館を所持した<sup>26)</sup>。

またロランは、土地の獲得ばかりでなく、絵画・彫刻・タペストリーなどの美術作品の注文にも携わっていた<sup>27)</sup>。現存するものには、『ロランの聖母子』(図5)や『ボーンヌの祭壇画』などの初期フランドル絵画、「木こり」を表わしたタペストリー(図8)、そして磔刑を主題とする板絵や彫像(図9、図10)がある。

他方で、ロランはさまざまな宗教施設の保護や寄進も行った。彼は、生地オータンのノートル・ダム聖堂の改築を行い、数々のミサ基金をもうける。また、一四三四年には夜明け前のミサを唱える特別許可を教皇エウゲニウス四世(在位一四三二〜一四四七年)から得た<sup>28)</sup>。さらにロランは、ローマ教会の要地アヴィニョンにも注力した<sup>29)</sup>。一四四六年には、息子ジャンとともに、アヴィニョンのセレスチン会修道院の礼拝堂の建設とミサ基金の設立を行った。礼拝堂は現存しないが、『ゴルゴタの丘』(図9)やロラン夫妻の彫像(図10)がこの礼拝堂の祭壇装飾として注文されたとも考えられる。

そしてロランは、施療院「神の家(Hotel-Dieu)」をボーンヌの街に創設した(図11、図12)<sup>30)</sup>。ロランは、教皇エウゲニウス四世から施療院の建設許可を一四四一年に得て、私財を投じて病院の整備を進めた。ロランが施療院の設立にあたって一四四三年に作成した創設書(acte de fondation)には、設立動機が「自身の救いのため」にあり、そのため「地上の財産」と「天上の財産」を交換することが明記されている<sup>31)</sup>。ここから、ロランにとっては、世俗上のステイタスが宗教上の成功でもあったことがうかがえる。このロランの行為を「あれほど多くの貧乏人をつくり出した者が…」

と皮肉る者もいたが<sup>32)</sup>、実のところ、ペストの影響を強く受け貧困にあえいでいたボーンヌの街は、施療院設立を契機に活気を取りもどした。むしろ、無償で看病を受けた貧しい病人たちも大いに助けられたはずである。

当時、このように財産の獲得や寄進につとめたのは、ロランに限ったことではなかった。たとえば、ブルゴーニュ公国の財務官ピーテル・ブラーデルリン(一四一〇頃〜一四七二年)も貴族の出自ではなく、ミデルブルフ城の造営や『ブラーデルリンの祭壇画』(図6)の注文によって自己のステイタスを高めようとした<sup>33)</sup>。また、やはり庶民の出であったギョーム・ユゴネー(一四二〇頃〜一四七七年)も、ブラーデルリンの死後の一四七六年にミデルブルフを手にし、四代目ブルゴーニュ公となったシャルル突進公(在位一四六七〜一四七七年)のもとでシャンスリエ職をつとめた<sup>34)</sup>。

そして、ブルゴーニュ公国において、貪欲な上昇志向をもつ政治家や役人たちの目標・模範(モデル)となったのは、誰よりもブルゴーニュ公その人であった<sup>35)</sup>。彼らはブルゴーニュ公を指標として、財産を増やしたり寄進を行ったのであり、ロランにも公の影響が顕著にうかがえる。まず、ロランが注文した『木こり』(図8)は、トゥルネーのパスキエ・グルニエ工房作と推定される三二〇×五一〇センチメートルのタペストリーだが、このような大きさ・図柄のタペストリーは王公や貴族が好んで注文するものだった。フィリップ・ル・ボンもまた、「木こり」を主題とするタペストリーをグルニエに依頼しており、ロランの注文は公を追随したものと考えられる<sup>36)</sup>。また、ボーンヌの施療院の建造物も、ブルゴーニュ公が関与したバレンシア地方の聖ヤコブ病院や、ディジョン北西の町トネールのノートル・ダム病院にならったことが指摘されている<sup>37)</sup>。

同様に、ロランが宗教上の寄進を熱心に行い、息子に聖職者の道を歩ま

せたのは、フィリップ・ル・ボンの立場をふまえたものであったと考えられる。フィリップは、つねに教皇庁との関係を良好に保ち、バーゼル公会議でフランスをはじめとする国々が反教皇側にまわったときですら、一貫して教皇を支持した<sup>38)</sup>。ロランもまたフィリップにならない、教皇の保護を確保することで、自身のステイタスを確立させようとしたのではないだろうか。

ロランのブルゴーニュ公を模範とする態度は、つぎに検討するように《ポーヌの祭壇画》(図1、図2)にもうかがえるように思われる。

### 三、ニコラ・ロランの祈祷者像

#### (一) 《ポーヌの祭壇画》におけるロランの祈祷者像

ここで改めて《ポーヌの祭壇画》(図1、図4、図15、図16)について確認したい。本作品は、ニコラ・ロランがブリュッセルの画家ロヒール・ファン・デル・ウエイデンに依頼した大型の板絵である<sup>39)</sup>。ロヒールはヤン・ファン・エイク没後の初期フランドル派を代表する画家であり、公国専属の画家ではなかったが、フィリップ・ル・ボンの肖像も制作した<sup>40)</sup>。ロヒールの代表作に挙げられる本作品は、閉扉時には約二一五×五六〇センチメートルにもなり、様式的には、閉扉時のパネル(外翼)に工房の手が認められる。制作年は、一四四三年のポーヌの施療院創立の表明時から、診療が開始された一四五二年のあいだと推定される<sup>41)</sup>。

本作品の閉扉時(図1)の主題は「最後の審判」であり、イエス・キリストを中心に天の玉座をかこむ聖母マリアと洗礼者ヨハネ、秤を持つ大天使ミカエル、そして彼らを取りまくように使徒たちや審判を受ける人々が

表わされる。多くの人物が描かれているが、この場面で注目し値するのは、使徒たちのさらに外側に、祈祷者の肖像が表わされている点である。それは向って左側から、教皇の三重冠をいただくエウゲニウス四世、司教冠をかぶり顔の右半分をみせるロランの息子ジャン、王冠をいただくフィリップ・ル・ボン、そしてニコラ・ロランである(図3)。これらの人物の同定は、他の肖像画との比較からおおむね認められている<sup>42)</sup>。とくにニコラ・ロランは、《ロランの聖母子》や『エノー年代記』献呈図のロランの描写(図5、図7)と比べられる<sup>43)</sup>。年齢の差はあるものの、これらのロランの描写には、四角い顔の輪郭や鼻と口のバランス、下唇の特徴的な形状、そして眉間に皺をよせた深刻そうな表情に共通点が見いだせる。

また、男性祈祷者たちの反対側にあたる右から二番目のパネルには、左からニコラ・ロランの妻ギゴヌ・ド・サラン、王冠をかぶったフィリップの妻イザベル・ド・ポルトガル、ロランの娘フィリポット・ロランが表わされていると推定される(図4)。さらに、閉扉時にはロラン夫妻の姿が見いだされる。彼らは、ブルゴーニュ宮廷で崇敬された疫病の守護聖人の聖セバステリアヌスと聖アントニウスに向かって祈っている(図2)。

本作品に描かれている人物はみな、ポーヌ施療院と関係が深かった。ニコラ・ロランは言うまでもないが、教皇エウゲニウス四世は、ポーヌの施療院設立を認可した人物であり、ジャン・ロランはオータン大司教として、一四四三年八月に行われた施療院の献堂式の司会をした。そして、フィリップ・ル・ボンは、一四四二年に、この施療院にかかわる租税を免除した<sup>44)</sup>。女性祈祷者のなかでは、ロランの妻ギゴヌの施療院への関与の深さが指摘されている<sup>45)</sup>。

以上に概観したように、《ポーヌの祭壇画》においては、ニコラ・ローラ

ン夫妻がパネルの表裏に登場するが、とくに祈禱者ロランの姿は、《ロランの聖母子》をはじめ、他の板絵や彫像などにも見いだすことができる。そこで以下では、他のロランの祈禱者像と本作品とを比較・検討したい。

## (二) 《ポーヌの祭壇画》以外のロランの祈禱者像

まず、《ロランの聖母子》(図5)は、六〇センチメートル四方の中型の板絵である。本稿の冒頭で述べたように、《ロランの聖母子》に描かれた祈禱者ロランは、祈禱対象の聖母子と空間を共有し、仲介聖人もなく画面を二分するという点で革新的な表現を有している。注文に関する資料は残されていないが、画家ヤンの様式から判断すると、制作年代はおおむね一四三〇年代なかばに位置づけられる。また、細部まで描きこまれた図像については多様な解釈がなされてきたが、時禱書におさめられる祈りの『聖母の小聖務日課』を反映した描写からは、本作品が私的な祈りに用いられたことがうかがえる<sup>(46)</sup>。

つぎに、ステンドグラス作品(図13)は、ポーヌの施療院の病室(「貧者の間」)の礼拝堂(図12)に主祭壇として設置されたものであり、施療院の建設にあわせて《ポーヌの祭壇画》と同時期以降に制作されたと考えられる。ステンドグラスは三層にわかれており、上段には受難具、中段には磔刑とフィリップ・ル・ボン夫妻、下段にピエタとニコラ・ロラン夫妻が表わされる。写実性は高くはないが、フィリップ、ロランとも紋章から人物を同定することができる。

第三に、《ゴルゴタの丘》(図9)は、南フランスのプロヴァンス地方もしくはラングドック地方で制作された六二×二〇七センチメートルの板絵である<sup>(47)</sup>。本作品の中央には磔刑に処されるキリスト、その両脇には聖

母マリアと福音書記者ヨハネが立つ。キリストの光輪の描写が完全でなく制作後に上部を切断されたと考えられるものの、図像・型式上の大きな変更はないと推定される。そして、聖母マリアの左側には聖セバスティアヌスとニコラ・ロラン、聖ヨハネの右側には司教に仲介されるジャン・ロランと推定される人物がそれぞれ祈禱台に跪く<sup>(48)</sup>。ニコラ・ロランが跪く祈禱台と甲冑には、紺青の地に三つの黄金の鍵を配したロラン家の紋章が描かれている。本作品の注文事情は明らかでないが、フランスの画家アンゲラン・カルトンが一四五二年に制作した祭壇画の《慈悲の聖母》(図14)との型式上・構図上の類似から、カルトン作品と同時期に祭壇画として制作されたと推察される<sup>(49)</sup>。

最後に、祈禱するロラン夫妻を表わした彫像(図10)は個人像に由来するもので、この作品の注文事情も明らかでない<sup>(50)</sup>。男性の衣服にロラン家の紋章要素の鍵が表わされているが、作品じたいの磨耗と損傷が激しいため、様式から制作年を特定することは難しい。しかし、高さ六〇センチメートル強の大きさから《ゴルゴタの丘》の下部または翼部に設置された祭壇装飾として、《ゴルゴタの丘》と同時期に制作された作品と位置づけられる。前述したように、これらの二作品はアヴィニョンの礼拝堂に設置された可能性も高い。

以上に挙げたニコラ・ロランの祈禱者像を比較すると、早い時期に制作された《ロランの聖母子》の祈禱者の存在がもっとも強調されており、その後は抑制されていくさまがうかがえる(図15・図19)。すなわち、一四三〇年代中頃に描かれた《ロランの聖母子》において跪き祈るロランは、ダマスク織の華麗な衣服をまとい、聖母とほぼ同じ高さで空間を共有し、仲介聖人もなく画面を二分する。それに対して、一四五〇年前後かそれ以

降の作である「貧者の間」のステンドグラスにおいては、ロランは最下段で聖人の仲介を受ける控えめな姿であらわされている。同様に《ゴルゴタの丘》においては、ロランは金地の画面に聖人の仲介を受けつつ画面隅の方で跪いており、フランスで制作されたという地方性を考慮しても、抑制された表現であると言えるだろう。

そして《ボーンヌの祭壇画》では、ロランは、質素な黒服を身につけ、最後の審判のいち登場人物として隅の方に表わされる。また、祭壇画外翼では聖なる対象とパネルを分けて跪く。とくに、外翼では二聖人と上部の「受胎告知」は無彩色の彫像で表わされ、祈祷者たちとの次元の違いが強調されている<sup>④</sup>。ここに挙げたロランの祈祷者像のなかで《ロランの聖母子》の描写がもっとも革新的に思われる理由には、この作品の私的性格が強く、画像を自由に表わすことができた可能性をふまえる必要があるだろう。とはいえ、《ロランの聖母子》にも公的な役割が少なからず担わされたであろうことに鑑みるに、作品の公的・私的性格という観点では説明しつくせないように思われる<sup>⑤</sup>。

ここで注目したいのは、ボーンヌの施療院におけるフィリップ・ル・ボンの重要性である。前述したように、フィリップは《ボーンヌの祭壇画》や「貧者の間」の礼拝堂のステンドグラスに表わされている。彼は、施療院にかかわる租税免除を認めただばかりでなく、この施療院に二連画を寄贈するなど<sup>⑥</sup>、とくに関係の深い人物だった。それゆえ、施療院に設置された美術作品に、フィリップに対する意識や配慮が反映されたとしても不思議ではない。

以下では、《ロランの聖母子》から《ボーンヌの祭壇画》にいたるロランの祈祷者像の変化の背景として、一四四〇〜一四五〇年代に多く表わされ

たフィリップ・ル・ボンの祈祷者像に注目し、ロランの描写と比較してきた。<sup>⑦</sup>

#### 四、ニコラ・ロランとフィリップ・ル・ボン

##### (一) ニコラ・ロランとフィリップ・ル・ボンの祈祷者像

フィリップ・ル・ボンの祈祷者像は、一四四〇〜一四五〇年代の写本挿絵に多く表わされた(図20、図21)<sup>⑧</sup>。その特徴は、祈祷対象を崇敬しつつも、祈祷対象と同一空間に同じ大きさで描く構図、金羊毛の首飾りを身につける黒色の衣服、紋章などで装飾した祈祷台や天幕、そして同一写本内に祈祷者を繰り返しかえし表わす手法にある。このような表現は、ブルゴーニュ公としての権威を示すとともに、ニコラ・ロランをはじめとする同時代の公国関係者の祈祷者表現にも影響を与えたと捉えられる。

それはまず、祈祷者の服装である。フィリップは、父ジャン・サン・プーが暗殺された事件を機にほぼ必ず黒色の服を身につけるようになった<sup>⑨</sup>。《ボーンヌの祭壇画》におけるロランは、フィリップのような毛皮縁のある黒服を着用している。このような黒服は《ブラーデリンの祭壇画》(図6)や、同様にロヒールが制作した《ド・クロワの二連画》(サン・マリノ、ハンティントン図書館/アントウェルペン、王立美術館)、《磔刑の祭壇画》(ウィーン、美術史美術館)の祈祷者にも見いだされ、宮廷関係者たちのあいだで流行していたことがうかがえる。

つぎに、祈祷者を繰り返しかえし登場させる手法が挙げられる。フィリップは『フィリップ・ル・ボンの聖務日課書』(ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9026, 9511)内では三回、『フィリップ・ル・ボンの祈祷書』(ミュ

ンヘン、バイエルン州立図書館、cod. gall. 40) では四回、そして『フィリップ・ル・ボンの時祷書』(ハーグ、王立図書館、Ms 76, F2) においては八回も祈禱する姿を描かせることで、自身の存在を誇示した。同様に、『ポーヌの祭壇画』におけるロランもまた、パネルの表側と裏側に描かれている。「貧者の間」のステンドグラスに表わされたロランの姿も含めると、祭壇画の表裏に関わらず、その姿はつねに二重に繰り返されたことになる。

さらに、フィリップの祈禱者像には、祈禱者と祈禱対象を結びつける繊細な工夫が見られる。『フィリップ・ル・ボンの聖務日課書』の挿絵(図21)において、フィリップは、色鮮やかな天幕のなか、紋章のついた祈禱台に跪く<sup>⑧</sup>。祈禱対象である公国の守護聖人アンドレに対して画面を二分する点は『ロランの聖母子』とも類似しているが、ここでフィリップは祈禱対象より低い位置に跪くことで出過ぎた表現とならないようバランスをとっている。そのうえで、フィリップが跪く天幕の左側の布地を聖アンドレの立つ建造物にからめ掛けることで、聖アンドレとフィリップが空間を共有していることを強調している。さらに、フィリップを囲む天幕の上部には、聖アンドレの十字架と「ブルゴーニュ公国の火」のモチーフが組み合わされ、両者が関連づけられている。

このような表現と通底するモチーフとしては、『ポーヌの祭壇画』の大天使ミカエルがもつ天秤の構図の変更を挙げられる(図22～図24)。「最後の審判」における人間の魂は、通常は重い方が天国とされ、キリストの右側(向かって左側)に描かれる<sup>⑨</sup>。それに対して、本作品では、当初は重い方として表わされていた皿を軽い方へと変更している。秤に載る人物は「徳(Virtues)」と説明され、天国に行く信者を表わしていることは明

らかである。ロヒールが制作途中でこれほど明確な変更を行うのは珍しいが<sup>⑩</sup>、それは、魂は罪の重荷をふり捨て軽やかにならねばならないという当時の神学者の思想に示唆をうけたためであることが指摘されている<sup>⑪</sup>。ロランとの関係では、修正により、ミカエルの上方に座すキリストの両手がうみだす斜めの方向性が強調され、祈禱者ロランの側を救済するというメッセージが強くなる点が興味深い。

この修正がロランの希望にかなうものであったことは、『ポーヌの祭壇画』の設置形態からもうかがえる。一般に、折りたたみ式の祭壇画は、平日は閉められ、祝日や特別の機会に開かれるものであったが、本作品は、パネルをつなぐ蝶番の跡から判断すると、第三の形態が取られた可能性があるという。すなわち、翼を部分的に折りたたみ、ロラン夫妻が大天使ミカエルを囲むような展示方法である(図25)<sup>⑫</sup>。これにより、ロランは「最後の審判」の中央に表わされたキリストと大天使ミカエルにより近い場所での祈ることとなり、ロランが「救済」の側にあることが強調されるのである。

なお、『ポーヌの祭壇画』の設置形態は『ヘントの祭壇画』(図26)にならったものとも推定されるが<sup>⑬</sup>、この形態によって聖なる人物との結びつきをより確保できるのは、『ポーヌの祭壇画』の祈禱者の方であるように思われる。それは、『ヘントの祭壇画』の方がパネル数が多く、「神秘の小羊の礼拝」を中心に多様な人物やモチーフが描きこまれているためである。

以上に検討したように、『ポーヌの祭壇画』の祈禱者ロランには、フィリップ・ル・ボンの祈禱者像を「モデル」としたような表現がみとめられた。ひるがえって、本作品の祈禱者が『ロランの聖母子』よりも抑制的な



表現となったのは、ロランがフィリップにならない、祈禱対象とのバランスに配慮したことも影響していると捉えられる。さらにそこには、祈禱対象への配慮ばかりでなく、ブルゴーニュ公や教皇エウゲニウス四世への謙遜も含まれているように思われる。

## (二)「モデル」への配慮

すでに検討したように、《ボーンヌの祭壇画》は、「貧者の間」(図12)の礼拝堂に設置され、ロランばかりでなく、入室している病人たちや訪問客が目にするものだった。本作品は、まずは、死を前にした病める貧者たちに対して「最後の審判」を示し、心の準備をさせる役割を担ったと考えられる。このような状況で、ときには第三の設置形態がとられ、ロランのステイタスが強調されることもあっただろう。

他方で、施療院の設立にも関わったフィリップ・ル・ボンや宗教上の権威である教皇エウゲニウス四世のような訪問客に対しては、とりわけ配慮がなされたはずである。《ボーンヌの祭壇画》の「最後の審判」場面において、エウゲニウス四世は祈禱者群の最前列に描かれる(図3)。また、フィリップは、襟と袖に毛皮のついた金糸織りの豪華な服をまとい、王冠をいただく。さらに、ステンドグラスでは、フィリップが色鮮やかな紋章をつけた武装姿で表わされ、称揚される(図13)。それに対して、祭壇画に描かれたロランはフィリップの後方、ステンドグラスでは下方に慎ましくたたずんでいる。ロランの息子ジャンもまた、祭壇画の肖像群の後方に断片的にしか描かれていない。これらの表現は、フィリップの祈禱者表現を範としてうまれたというよりも、公や教皇の視線を意識したからこそ選択されたのではないだろうか。

最後に、とくにフィリップ・ル・ボンに対するロランの謙遜や配慮がうかがえる例として、クールテペーの伝える以下のエピソードを挙げたい<sup>(20)</sup>。

ロランはある日、いち弁護士に着る質素な短いガウンをまとして、フィリップ・ル・ボンの前に出た。フィリップは「シャンスリエの地位にはどうもふさわしくない服を着ているのは、どういうわけか」と尋ねた。ロランは、「公から頂戴した財産を全部お返しして、もう一度、駆け出しの頃の弁護士に戻って、そのうえでご愛顧をいただくのがよいと思ったのです」と答えた。そこでフィリップが、「そなたの敵どもをいっそうあわてふためかせてやろう」と、さらにロランに贈り物を与えることを約束した。

このエピソードは、ロランをねたむ者たちを黙らせる行為であったと捉えられている<sup>(21)</sup>。だが、そこには、ロランの「モデル」としてのフィリップへの敬意や配慮も少なからず込められているように思われる。

以上に検討してきたように、ニコラ・ロランは、ブルゴーニュ公国の「第一人者」のシャンスリエであったが、公国の貴族たちと競うために、ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンを「モデル(模範)」とし、領主権や美術作品などの「地上の財産」を抜き増やしていった。また、ロランの祈禱者像については、《ロランの聖母子》よりも、後に描かれた《ボーンヌの祭壇画》の祈禱者の方が抑制された表現となっている。そこには、一四四〇年代以降に多く表わされたフィリップの祈禱者像からの影響と、フィリップや教皇エウゲニウス四世に対する配慮がうかがえる。むしろ



ん、ロランは《ロランの聖母子》が制作されたと推定される一四三〇年代にもすでにシャンスリエとしてブルゴーニュ公に仕えていたが、ロランの祈祷者表現の変化の契機となったのは、ボーンの施療院の設立にともなう美術作品の注文であったと位置づけられるのではないだろうか。この点で《ボーンの祭壇画》は、初期フランドル絵画の祈祷者表現の転換点となる重要な作例であったと言えるだろう。

〔附記〕本研究は、平成二五年度科学研究費（研究活動スタート支援、課題番号 24820067）による研究成果の一部である。

註

- (1) 《ロランの聖母子》については、以下を参照。Micheline Comblen-Sonkes & Philippe Lorentz, *Musée du Louvre Paris. II, Corpus de la peinture des anciens Pays-Bas méridionaux au quinzième siècle*, 17, Bruxelles, 1995, pp. 11-80; 今井澄子「聖母子への祈り―一五世紀前半のフランドル絵画における祈祷者表現の研究―」博士論文、慶應義塾大学、二〇〇九年。
- (2) 《ブラーデリンの祭壇画》については以下を参照。木川弘美『初期ネーデルラント絵画に描かれた「降誕の穴」』博士論文、早稲田大学、二〇〇五年。
- (3) 《ボーンの祭壇画》について論じた文献は多くがあるが、とくに以下を参照。Shirley Neilsen Blum, *Early Netherlandish Triptychs: A Study in Patronage, Berkeley/Los Angeles*, 1969; Nicole Veronée-Verhaegen, *L'Hôtel-Dieu de Beaune, Les Primitifs flamands: I. Corpus de la peinture des anciens Pays-Bas méridionaux au quinzième siècle*, 13, Bruxelles, 1973; Barbara G. Lane, "Requiem aeternam dona

eis": the Beaune Last Judgment and the Mass of the Dead," *Simiolus*, 19, 1989, pp.166-180; Janey L. Levy, "The Keys of the Kingdom of Heaven: Ecclesiastical Authority and Hierarchy in the Beaune Altarpiece," *Art History*, 14, 1991, pp. 18-50; Dirk de Vos, *Rogier van der Weyden, Iznave complet*, Paris, 1999, pp. 259-262; Lynn F. Jacobs, *Opening Doors: The Early Netherlandish Triptych Reinterpreted*, Pennsylvania, 2012, pp. 111-115, 309-310.

(4) 《ロランの祭壇画》と比較したのは以下の論考である。今井澄子「描かれた彫像」における台座の象徴的意義―一五世紀フランドル絵画におけるイメーシの使用をめぐる一―『芸術学』七号、二〇〇三年、四四―五六頁；J.R.J. van Asperen de Boer, "A Note on the Original Disposition of the Ghent altarpiece and the Beaune polyptych," *Oud Holland*, 117, 2004, pp. 107-118.

(5) ニコト・ロランの生涯については以下の文献を参照。Arsène Perier, *Nicolas Rolin: 1380-1461*, Paris, 1904; Henri Premeau, "Nicolas Rolin," *Biographie Nationale de Belgique*, 19, Bruxelles, 1907, cols. 828-839; Hermann Kamp, *Memoria und Selbstdarstellung: Die Stiftungen des burgundischen Kanzlers Rolin, Signaringen*, 1993; Herta-Florence Pridat, *Nicolas Rolin: Chancelier de Bourgogne*, Dijon, 1996, in part. pp. 67-109; 田辺保『ボーンで死ぬとどうなる』みすず書房、一九九六年; Marie-Thérèse Berthier & John-Thomas Sweeney, *Le Chancelier Rolin 1376-1462*, Précy-sous-Thil, 1998.

(6) シャンスリエ (chancelier) の訳語には、宰相、官房長、大書記官などがある。しかし、これらの訳語では司法と行政を兼ね備えた最高職というニュアンスがはわりにくく思うので、本稿では原語のままを用いる。

(7) ブルゴーニュ公国におけるシャンスリエの職については、以下を参照。Berthier & Sweeney, *op.cit.*, pp. 67-94.

- (8) 英仏間の百年戦争とフランスの和議については、以下を参照。Richard Vaughan, *Philip the Good: The Apogee of Burgundy*, London, 1970, pp. 98-126.
- (9) ロランの実務能力やフィリップとの関係については、以下を参照。Joseph Calmette, *Les Grands ducs de Bourgogne*, Paris, 1976, pp. 228-230. (シモン・カルメット、田辺保訳『ブルゴーニュ公国の大公たち』国書刊行会、二〇〇〇年、二五四～二五六頁。)
- (10) Perier, *op.cit.*, pp. 60-61.
- (11) シャンゼはじもとやロランの頭下たちについては、以下を参照。Berthier & Sweeney, *op.cit.*, pp. 393-398.
- (12) 『エノー年代記』は、フリップ・ル・モンが一四四六年三月にジャン・ウォークランにラテン語からフランス語への翻訳を依頼した書である。ジャン・ビューレンの考察によれば、挿絵は一四四七年秋頃に制作された。Anne Hagopian van Buren, “New Evidence for Jean Wauquelin’s Activity in the Chroniques de Hainaut and for the Date of the Miniatures,” *Scriptorium*, 26, 1972, pp. 249-268. 近年の論考は、以下を参照。De Vos, *op.cit.*, pp. 249-251; Christiane van den Bergen-Pantens, éd., *Les Chroniques de Hainaut, ou, Les ambitions d’un prince bourguignon*, Bruxelles, 2000.
- (13) 他たの『エノー年代記』献呈頁たのむに、挿絵が二五五頁存じらる(フリートンヤル、王立図書館、ms. 9043, fol. 2; ms. 10976, fol. 2)。フレイミン・ル・ヤンへの献呈図については、以下を詳し。Pascal Schandel, “Les images de dédicace à la cour des ducs de Bourgogne: Ressources et enjeux d’un genre,” dans Bernard Bousmanne & Thierry Delcourt, éd., *Miniatures flamandes, 1404-1482*, Paris/ Bruxelles, 2011, pp. 66-80.
- (14) “Cestui chancelier, ...soloit tout gouverner tout seul et à par luy manier et porter tout, fust de guerre, fust de paix, fust en fait de finances. De tout et en tout le duc s’en attendoit à luy et sur luy comme principal reposoit, et n’y avoit, ne office, ne bénéfice, ne par ville, ne par champs, en tous ses pays, ne don, ne emprunt fait qui tout par luy ne se fésist et conduisist et à luy ne respondist comme le regardeur sur tout...” Georges Chastellain, M. Kervyn de Lettenhove, éd., *Œuvres*, III, Bruxelles, 1836-1866, pp. 330-331.
- (15) “Environ ce temps, en la ville d’Anthin en Bourgogne, mourut maître Nicolas Raulin, chevalier, chancelier du duché de Bourgogne agié de quatre vingt et six ans ou environ, de laquelle ville d’Anthin son fils estoit évesque, et cardinal de notre saint Pere; et combien que ledit maître Nicolas fust venu de petit lieu, sy fust toutesfois premier advocat en parlement, et puis chancelier, comme dit est, auquel office il sy gouverna tellement, qu’il y acquista plus de quarante mille florins de rente, et fust tous ses enfans des grands seigneurs, et ses filles alla très hautement, et gouverna le duc tellement, que, durant son temps, ledit duc regna très hautement, et n’y avoit sy hault prince qui ne le doubta...” Jacques du Clercq, Frederic de Reiffenberg, éd., *Mémoires*, III, Bruxelles, 1823, pp. 202-203.
- (16) Calmette, *op.cit.*, pp. 229-230. (カメット、通稱書、二五五頁。)
- (17) Chastellain, *op.cit.*, IV, pp. 217-218; Berthier & Sweeney, *op.cit.*, p. 325.
- (18) “...Moult estoit sage cest homme droit-cy, quant au regard du monde, mais sa voye ne sambloit point capter les deux sapiances, car par soy donner trop à l’une qui estoit caduque et fallible, il se sambloit estlongier de la plus certaine et de la plus mémorable, et messonnoit tousjours en la terre comme si terre lui eust est é perpétuelle, là où son sens desvoia et l’abesti sa prudence, ...” Chastellain, *op.cit.*, III, pp. 330-331.

- (19) "...le dit chancelier fust réputé ung des sages hommes du royaume, à parler temporellement; car au regard de l'espirituel, je m'en tais." Du Clercq, *op.cit.*, III, p. 203.
- (20) Perier, *Ibid.*
- (21) 田辺、前掲書、一三三五頁。
- (22) Chastelain, *op.cit.*, VII, p. 222. フィリップの信心のことだが、以下も参照。Bertrand Schnerb, "La piété et les dévotions de Philippe le Bon, duc de Bourgogne (1419-1467)," dans *Complex-rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 149, 2005, pp. 1319-1344.
- (23) ホイジンガ、堀越孝一訳『中世の秋』第II巻、中公クラシック、二〇〇一年、三〜四〇頁、とくに九〜一二頁 (Johan Huizinga, *Herfstij der Middellevven*, Hartem, 1919)。
- (24) ホイジンガ、前掲書、二四七〜二四八頁。
- (25) 一四三三年までには、オートゥーム、マルティニー・ル・コント、一四二九年には、ナンキューイズ、エメリー、エノー地方のレズム、一四三〇〜三二一年にはモネトワ、一四三二年にはリシーなどの領主権を獲得している。さらに、一四三四年には、ブラニー・レ・ベルダン、ナン・カン・レヴェルモンを、一四三五年には、マルティニー・ル・コント、ペリエール、ルグニール・プランシ、ブラニー、ギュエ・シュール・セーヌなどを手に入れている。Perier, *op.cit.*, pp. 60-61; Preme, *op.cit.*, p. 837; Berthier & Sweeney, *op.cit.*, pp. 388-392.
- (26) Berthier & Sweeney, *op.cit.*, p. 404.
- (27) この点については、以下を参照。Brigitte Maurice-Chabard et al., *La splendeur des Rolin: Un mécénat privé à la cour de Bourgogne*, Table ronde 27-28 février 1995, Paris, 1999.
- (28) Philippe Lorentz, "Nouveaux repères chronologiques pour la Vierge du chancelier Rolin de van Eyck," *La Revue du Louvre et des Musées de France*, 42, 1992, pp. 42-49, in part. doc. 4.
- (29) ロランのマウイニョンへの寄進については、以下を参照。Angélique Segura, "Le mécénat des Rolin à Avignon," dans Maurice-Chabard et al., *op.cit.*, pp. 135-144. ロランの建設した礼拝堂は一八五九年に壊された。また、礼拝堂と《コルゴタの丘》や《ロラン夫妻》との関係については以下を参照。Maurice-Chabard et al., *op.cit.*, pp. 276, 284.
- (30) ボーヌの施療院については、とくに以下を参照。E. Bavard, *Hôtel Dieu de Beaune, 1443-1880*, Beaune, 1881; 田辺、前掲書, Maurice-Chabard et al., *Ibid.*
- (31) 創設書には以下のように述べられている。「騎士にしてオートタンの市民、またオートゥームの領主にしてブルゴニエ公国のシャンスリエである私ことニコラ・ロランは、この一四四三年八月四日、日曜日、全ての人間的な懸念を捨て、私の救いのために、幸福な取引によって神の御慈悲のおかげで私が獲得した地上の財産を天上の財産と交換することを切望する。ローマ教会の認可を得、あらゆる慈悲の源である主が私を満たして下さった資産に感謝をなさげて、今ここに、この先永遠に、ボーヌの町に、全能の神と栄光の母にして永遠に処女であるマリアをたたえ、いと幸いなる聖アントニウスをあがめ、その名をもつ病んだ貧者たちのための施療院を創設し、以下の条件で寄贈することを決意すべし…」"Ego Nicolaus Rolini, miles, civis eduensis, dominus de Authuma, Bisuntinensis diocesis, et cellarius Burgundie, hac dominicâ die, quartâ mensis Augusti, anno Domini millesimo quadringentesimo quadragesimo tertio; humanis postpositis sollicitudinibus, de propria salute recogitans, ac temporalia, divina michi

- largitione concessa, in coelestia, transitoriaque in aeterna, felici commercia, commutare cupiens; facultate Sancte Sedis Apostolice michi concessa, et suffragante gratoque assensu ejusdem, prout in Bullis Apostolicis inferius transcriptis plenius continetur; in recognitionem gratiarum et honorum à Domino Deo, à quo bona cuncta procedunt, michi factorum; à modo, ex nunc et in perpetuum, sine revocatione, erigo, condo, facio, construo et do, in oppido Behe, eduensis diocesis, unum hospitale pro receptione, usu, et habitatione pauperum infirmorum, cum una cappella, ad honorem omnipotentis Dei et sue gloriosissime genitricis Marie semper Virginis, ac reverentiam et memoriam beati Antonii Abbatis et sub ejus nomine, seu vocabulo, de propriis bonis ab ipso domino Deo michi collatis prout sequitur ..” Arch. de l’hotel Dieu de Beaune; Pridat, *op.cit.*, pp. 189-194 (Document 14); 田辺『前掲書』一四五頁。
- (32) フランス王ルイ十一世（一四三三～一四八三年）はごちのような言葉を残したという。「生きている間、あれほど多くの貧乏人をつくり出した者が、死ぬ前に貧乏人のための避難所をつくっておいてやったのは、正当なことだったのだ。」“Il était bien juste que celui qui avait fait tant de pauvres pendant sa vie, leur préparât un asyle avant de mourir.” Claude Courtépée, *Description générale et particulière du duché de Bourgogne*, Paris, 1847, II, p. 296. 邦訳は以下から一部改変して引用した。田辺『前掲書』一三七頁。
- (33) Wim de Clercq et al., ““Vivre Noblement”: Material Culture and Elite Identity in Late Medieval Flanders,” *The Journal of Interdisciplinary History*, 38, 2007, pp. 1-31.
- (34) De Clercq et al., *Ibid.*
- (35) Hermann Kamp, “Le fondateur Roïin, le salut de l’âme et l’imitation du duc,” dans Maurice-Chabard et al., *op.cit.*, pp. 67-80; De Clercq et al., *op.cit.*, p.2.
- (36) フォリップがブルネヒに一四六一年と一四六六年に注文した記録が残る。Maurice-Chabard et al., *op.cit.*, pp. 277-280.
- (37) Kamp, *op.cit.*, “Le fondateur...,” p. 78.
- (38) 公会議とブルゴニエ公の関係については、以下を参照。Vaughan, *op.cit.*, pp. 205-238; Joachim W. Stieber, *Pope Eugenius IV: The Council of Basel and the Secular and Ecclesiastical Authorities in the Empire*, Leiden, 1978, in part, pp. 41, 58-63.
- (39) 《ボームの祭壇画》の制作年や帰属などの基本情報については、以下を参照。Veronée-Verhaegen, *Ibid.*
- (40) ロヒール作のオリジナルは現存しないが、コピーが複数残されている（フリネッ市立美術館ほか）。
- (41) Veronée-Verhaegen, *op.cit.*, pp. 72-74.
- (42) ただし、とくに女性祈祷者については異説も少なくなじ。Veronée-Verhaegen, *op.cit.*, pp. 38-39.
- (43) デスマーは『エノー年代記』や《ロランの聖母子》と《ボームの祭壇画》に描かれた男性の容貌を解剖学的に分析し、各々をニコラ・ロランであると結論づけている。Jules Desmoux, “Nicolas Roïin, authentique donateur de la Vierge d’Autun,” *La Revue des Arts*, 4, 1954, pp. 195-200, in part, pp. 198-199.
- (44) 田辺『前掲書』一三八～一三九頁。
- (45) 田辺『前掲書』一三八～二四二頁。同書で指摘されるギョームス・ド・サランの重要性については、稿を改めて論じた。
- (46) 今井『前掲書』二〇〇九年。
- (47) この作品については以下を参照。Michel Laclotte & Dominique Thiebaud,

- L'école d'Avignon*, Paris, 1983, p. 217; Maurice-Chabard et al., *op.cit.*, pp. 284-285.
- (48) シャン・ロランの同定については異論もあるが、様式の違いを踏まえると、シャン・エイの《降誕》（オートマン、ロラン美術館）に描かれる祈祷者ジャンの骨格や顔のくくりと類似しているように思われる。Maurice-Chabard et al., *op.cit.*, pp. 284-285.
- (49) カルトン作品は、シャン・カダールにより、一四五二年にアヴィニョンのセレスタン修道院のピエール・ド・リュクサンブール礼拝堂のために注文された。この作品の作者や機能をめぐる議論については、以下を参照。Laclotte & Thiébaud, *op.cit.*, pp. 80, 225-227; Dominique Thiébaud et al., *Les Primitifs français: Découvertes et redécouvertes*, Paris, 2004, pp. 112-113. なお、『コトコタの丘』を祭壇画のブレデッラとする説もあるが、当時フランスで制作されたブレデッラとしては大きすぎると指摘される。Laclotte & Thiébaud, *op.cit.*, p. 217.
- (50) 本作品については以下を参照。Maurice-Chabard et al., *op.cit.*, p. 276.
- (51) この点に関しては、以下の拙稿を参照。今井、前掲書、二〇〇三年。
- (52) 《ロランの聖母子》の機能をめぐる議論については、以下を参照。今井、前掲書、二〇〇九年。
- (53) 二連画の一方には聖母とブルゴーニュ公国の守護聖人ヘルナルドゥス、他方には祈るフィリップ・ル・ボンが表わされていた。“ung autre où est Nostre-Dame et saint Bernard d'un costé, et de l'autre costé la portraiture de feu Monseigneur le duc Philippe...” J.B.C. Boudrot, “Inventaire de l'Hôtel-Dieu de Beaune(1501).” *Mémoires de la Société d'Histoire, d'Archéologie et de Littérature de l'Arondissement de Beaune*, 1874, p. 123.
- (54) フィリップ・ル・ボンの祈祷者像については、以下の拙稿を参照。今井澄子「信心のモデル、自己称揚のモデル―ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの祈祷者像と初期フランドル絵画―」『大阪大谷大学紀要』第四八号、二〇一四年、一―二二頁。
- (55) Chastelain, *op.cit.*, I, pp. 187-188.
- (56) 『フィリップ・ル・ボンの聖務日課書』については以下を参照。Bernard Bousmanne et al., *La librairie des ducs de Bourgogne: Manuscrits conservés à la Bibliothèque royale de Belgique*, I, Turnhout, 2000, pp. 155-159.
- (57) たがえば、ロエールの影響が見られるハンス・メムリンク《ダンツィヒの祭壇画》（一四六七―一四七一年、グダニスク、国立美術館）など。最後の審判の図像については、以下を参照。Louis Réau, *Iconographie de l'art chrétien*, II, Paris, 1957, pp. 727-757.
- (58) Van Asperen de Boer, *op.cit.*, p. 114.
- (59) Veronée-Verhaegen, *op.cit.*, p. 93.
- (60) Van Asperen de Boer, *op.cit.*, pp. 107-118.
- (61) Van Asperen de Boer, *Ibid.* ただし、『セントの祭壇画』については、さまざまな設置形態の可能性が議論されている。Heinz Jürgen Sauernmost, “Die Sonntagsseite des Genier Altars oder Picior Hubertus Eysck. Maior quo nemo reperit.” *Pantheon*, 40, 1982, pp. 290-300.
- (62) Courtépée, *op.cit.*, p. 68. 邦訳は以下を一部変更して引用した。田辺、前掲書、二三三―二三七頁。
- (63) Courtépée, *op.cit.*, p. 68.





図1 ロヒール・ファン・デル・ウェイデン《ポーヌの祭壇画》1443-52年頃、約215×560cm、ポーヌ、施療院





図2 図1の裏面（《ポーヌの祭壇画》外翼）



図3 図1の部分（男性祈祷者たち）



図4 図1の部分（女性祈祷者たち）



図5 ヤン・ファン・エイク《ロランの聖母子》1430年代中頃、66×62cm、パリ、ルーヴル美術館



図6 ロヒール・ファン・デル・ウェイデン《ブラーデリンの祭壇画》（中央パネル）15世紀中頃、91×89cm、ベルリン、国立絵画館





図7 ロヒール・ファン・デル・ウェイデン（工房）《フィリップ・ル・ボンへの献呈》『エノー年代記』ブリュッセル、王立図書館、ms. 9242, fol.1r.

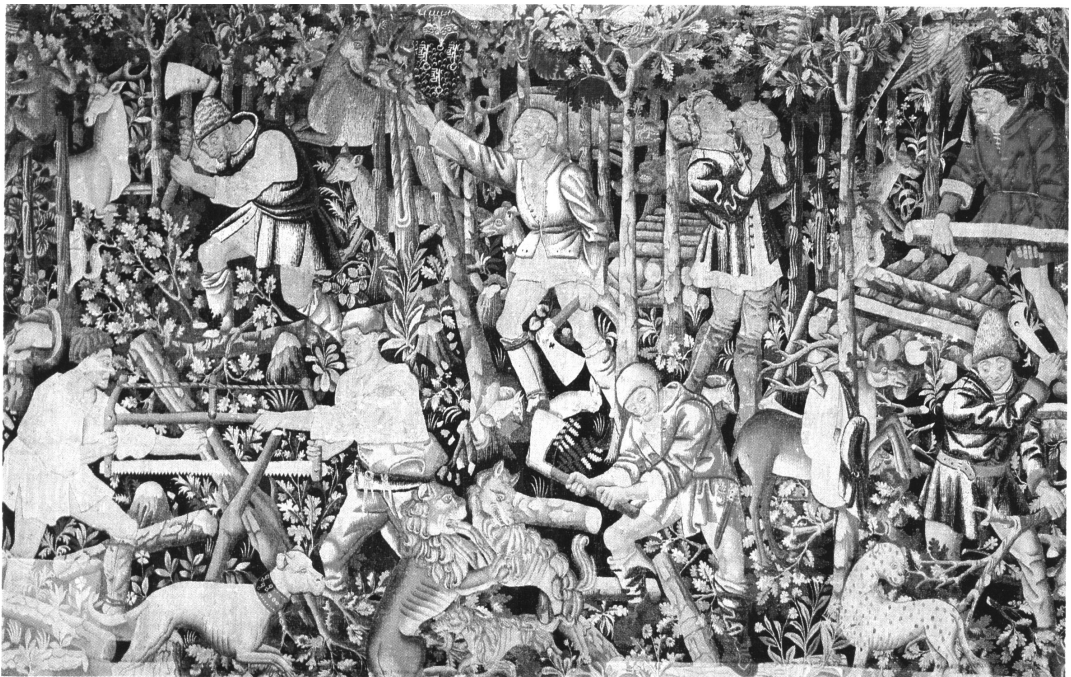


図8 パスキエ・グルニエ工房《木こり》1460年代頃、320×510cm、パリ、装飾美術館



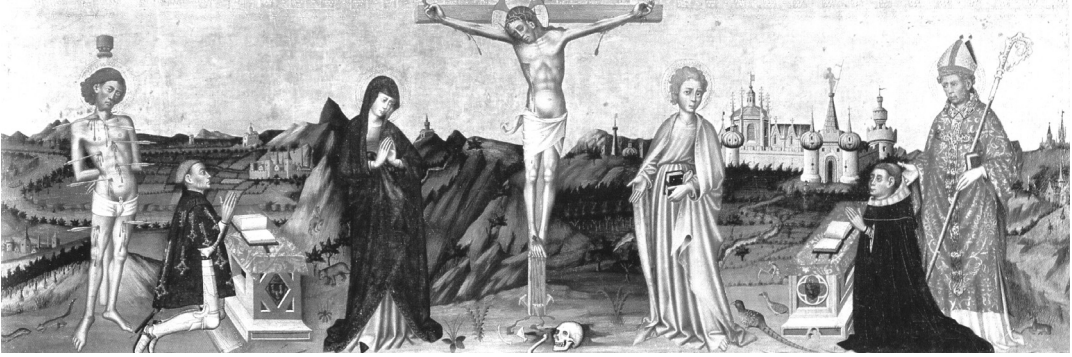


図9 《ゴルゴタの丘》62×207cm、エクサン・プロヴァンス、アルボー美術館



図10 《祈祷者ニコラ・ロランとギゴヌ・ド・サラン》65×127×37.5cm（ロラン） / 63×123×37cm（ギゴヌ）、ボーン、施療院

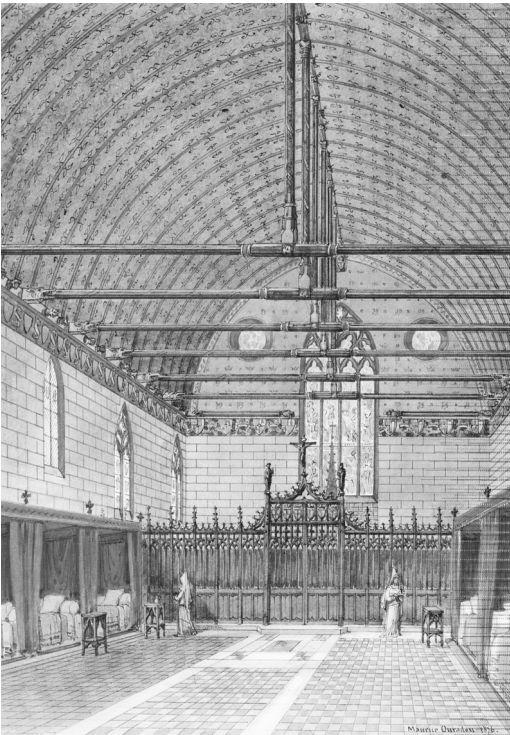


図12 モーリス・ウラドゥによる「貧者の間」のスケッチ、1876年、53×23.5cm、個人蔵



図11 ボーヌの施療院



図13 《磔刑と祈禱者たち》ステンドグラス、15世紀、ボーンヌ、施療院

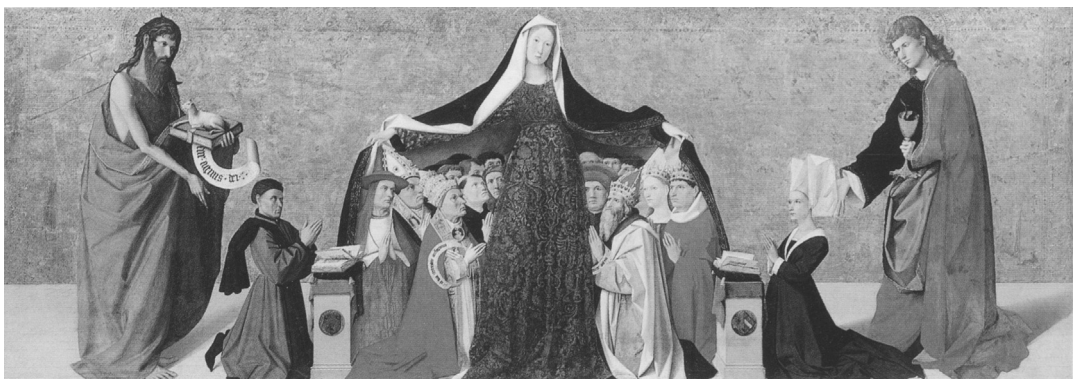


図14 アンゲラン・カルトン《慈悲の聖母》1452年、66×187cm、シャンティイ、コンデ美術館





図17 図13の部分 (ニコラ・ロラン)



図16 図2の部分 (ニコラ・ロラン)



図15 図1の部分 (ニコラ・ロラン)

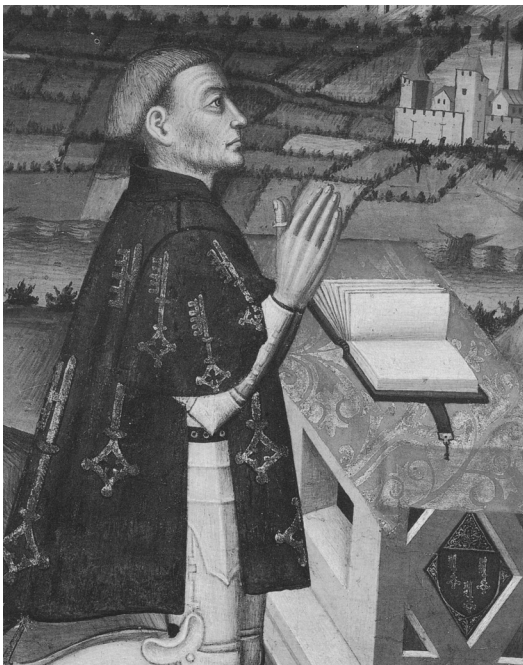


図19 図9の部分 (ニコラ・ロラン)



図18 図5の部分 (ニコラ・ロラン)



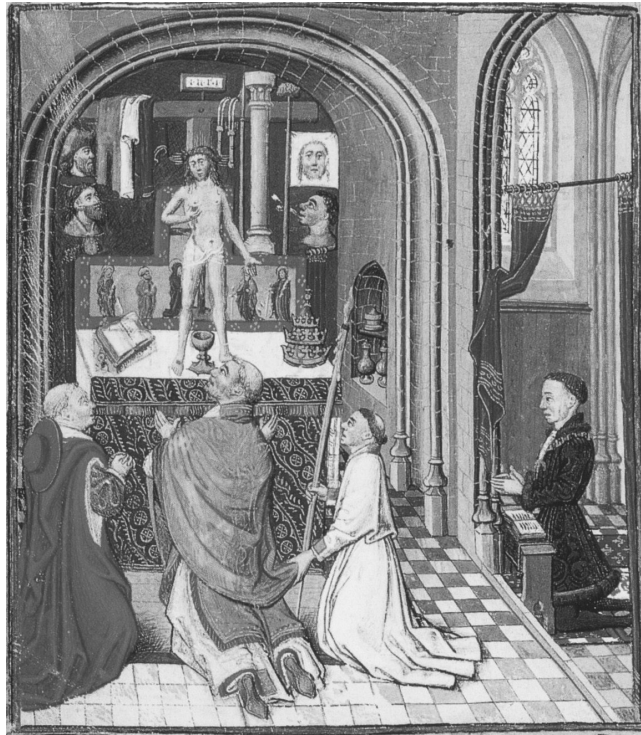


図20 《聖グレゴリウスのミサと祈禱者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの時禱書』1450-55年頃、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館、Ms. 3-1954, fol. 253v.



図21 《聖アンドレへ祈るフィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの聖務日課書』ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9511, fol. 398r.

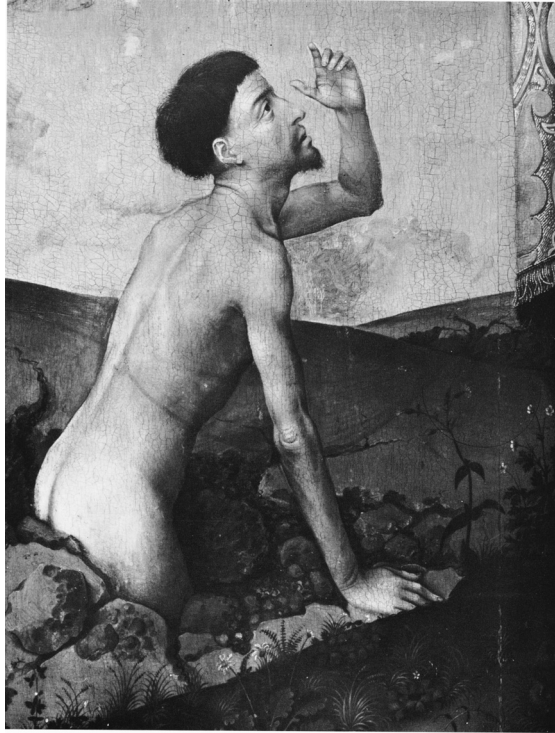


図22 図1の部分（「蘇る人」）の赤外線写真、N. Veronée-Verhaegen, *L'Hôtel-Dieu de Beaune*, Bruxelles, 1973, PL. CC. )

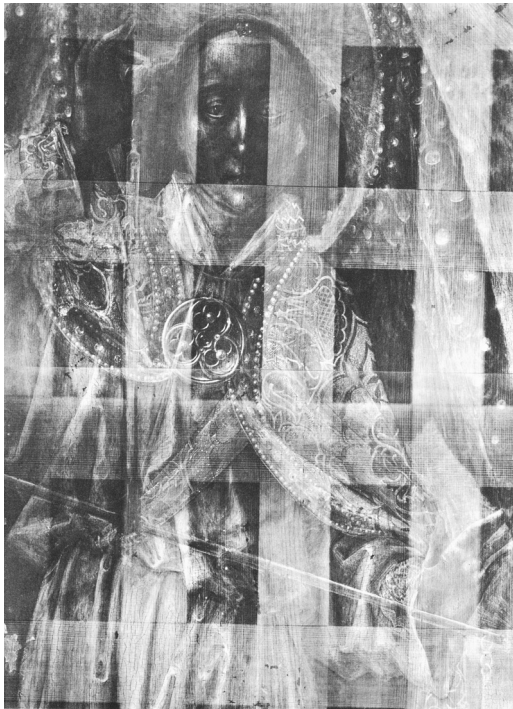


図24 図1の部分（「大天使ミカエル」）のX線写真、N. Veronée-Verhaegen, *L'Hôtel-Dieu de Beaune*, Bruxelles, 1973, PL. CXCVI. )



図23 図1の部分（「大天使ミカエル」）の赤外線写真、N. Veronée-Verhaegen, *L'Hôtel-Dieu de Beaune*, Bruxelles, 1973, PL. CXCVII. )





図25 《ボーンの祭壇画》の「第三の設置形態」(Van Asperen de Boer の説をもとに筆者作成)



図26 ファン・エイク兄弟《ヘントの祭壇画》外翼、1432年、約350×223cm、ヘント、シント・バーフ大聖堂